



# Malawi Voice vol.6

～アフリカの国・マラウイからのおたより～

青年海外協力隊 平成27年度3次隊  
言語聴覚士 飯田知美



## ごあいさつ

今年は4年に1度のオリンピックの年。みなさんの応援に熱がこもっているためか、今年は猛暑のようですね。スポーツが好きな私にとって、小さい頃からテレビでオリンピックを見るのはとても楽しい時間でした。どんなに離れた土地で開催されても、たとえ地球の反対側で開催されても、テレビをつけると中継（または日本時間に合わせて、VTR放送）で楽しむことができます。今までは考えたこともなかったのですが、日本からマラウイまでほとんど丸一日かけて移動してきた私にとって、この距離を一瞬で埋めることができる技術はすごいなあと思います。そしてなんと、マラウイでも衛星放送（有料）でオリンピック観戦が可能です。マラウイからも今回のリオオリンピックに5人の選手（アーチェリー・競泳・陸上）が出演しています。しかし、残念ながら私はテレビなど持っていないので見ることはできません。

よく考えてみると、国籍も文化も言語も異なる世界各国の人々が、“スポーツ”という1つのキーワードで、同じ時、同じ場所、同じ目的を共有できるなんてすごいことだと思いませんか？途上国で生活をしていても、言葉の違いや文化の違いにどんなに苦しめられたとしても、スポーツを通じて交流を深めることができます。私が初めて任地に来た時、到着後数日は手話も分からず、ジェスチャーも通じず、生徒と顔を合わすことすら憂鬱でした。ところが、任地に着いて3日目、生徒が我が家にやってきて、「一緒に遊ぼう！」と手話で誘ってくれました。ドキドキしながらグラウンドに行き、多くの生徒に取り囲まれても何も話せませんでした。ただ、サッカーのゲームが始まると、状況は一変。それまで全然伝わらなかったジェスチャーも、とっさに使った日本の手話も、なぜか通じました。2年間のマラウイ生活に一気に光が差し込んだ瞬間でした。海外で一度も生活をしたことがない私が、こんなにも早くマラウイの生活に慣れ、手話を覚え、生徒とのコミュニケーションを楽しみ、任地が好きになれたのは、きっとあの日のサッカーが大きなきっかけになったと思います。

スポーツは国境を越えます！がんばれニッポン！がんばれマラウイ！

2016年8月  
飯田知美





# マラウイの JICA ボランティア

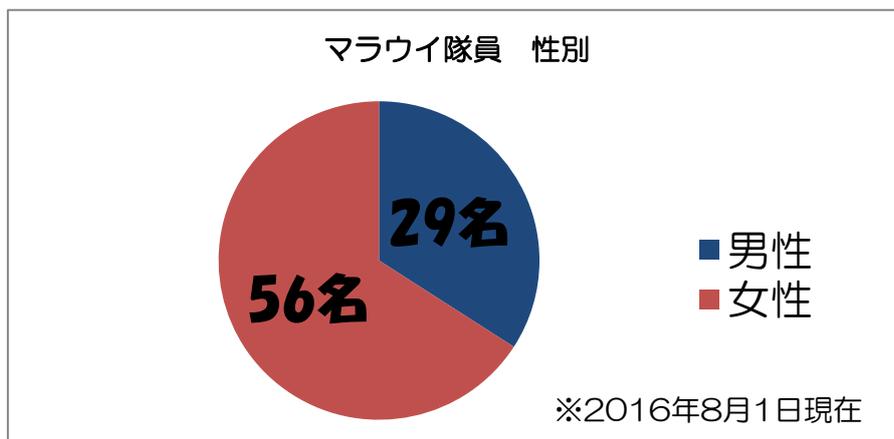


“マラウイ”という国をおたよりの読む前（または私が日本で話す前）に知っていた方はどのくらいいるでしょうか？私が協力隊に合格して「どこの国に行くの？」と尋ねられて答えた時、知っていた方はほとんどいませんでした。そして、何回「マラウイ」と伝えても、数日後には違う国名を言われてしまう…覚えてもらうことも難しい程、日本での知名度の低い国です。しかしそんなマラウイですが、実は青年海外協力隊のこれまでの累計派遣者数は 1,760名（2016年8月1日時点）。昨年50周年を迎えた JICA ですが、青年海外協力隊がこれまでに派遣された国は 88カ国あります。その中でマラウイはナンバーワンの派遣者数です。

2016年8月1日現在、マラウイでは 85名の JICA ボランティアが活動を行っています。たくさんの隊員が全国各地で様々な活動をしているので、おたよりの中でも、隊員の活動をご紹介していきたいと思っています。それに先立って、マラウイの JICA ボランティアの現状について簡単に説明したいと思います。

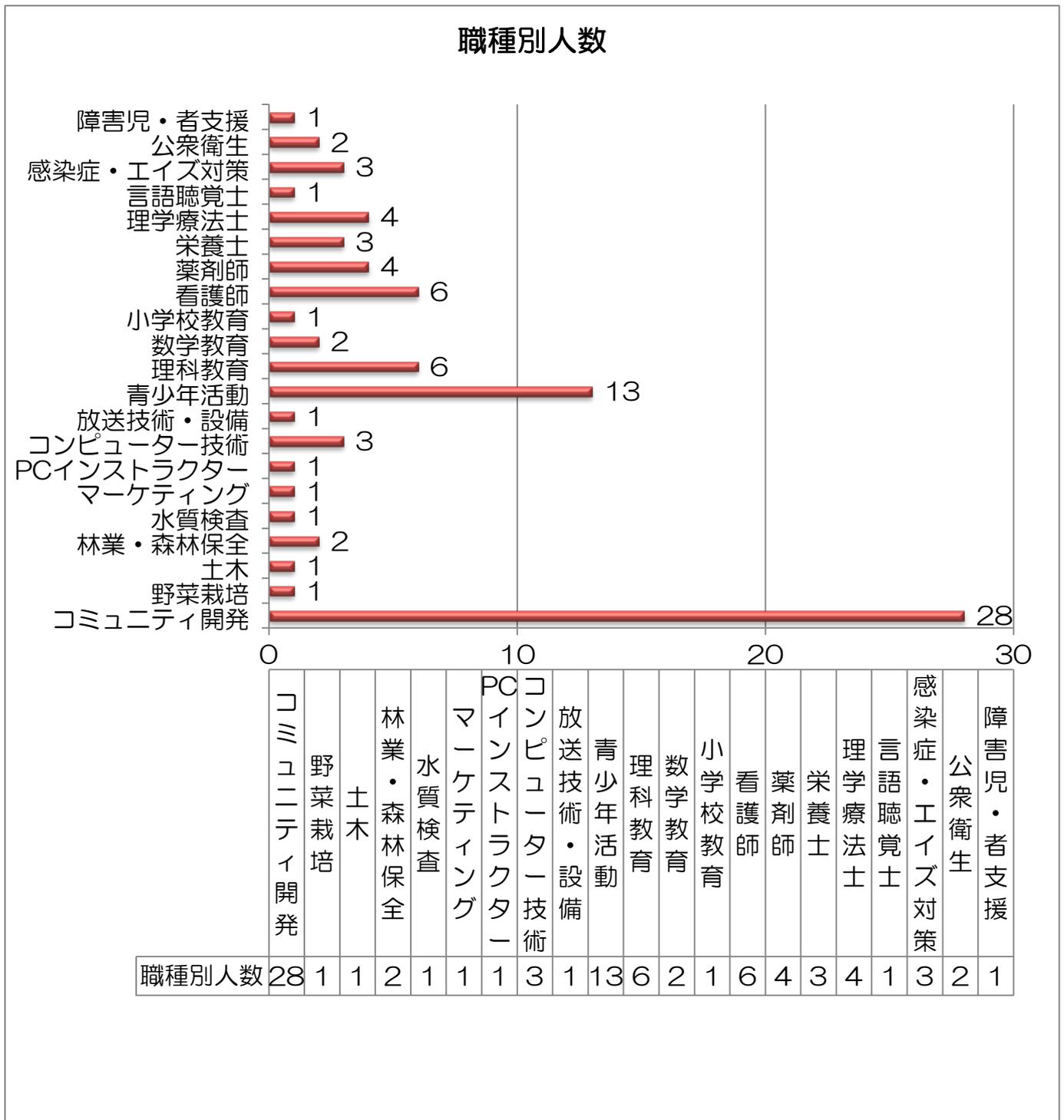
JICA ボランティアにはいくつかの種類があります。私は「青年海外協力隊（長期）」ですが、その他にも「シニア海外ボランティア」「日系社会青年ボランティア」「日系社会シニアボランティア」があります。それぞれ応募可能な年齢の違い、派遣される地域等の違いがあります。さらに、派遣期間の違いで、長期ボランティアと短期ボランティアがあります。詳しく知りたい方は「JICA」のホームページをご覧ください。マラウイでは現在「青年海外協力隊（長期）」「青年海外協力隊（短期）」「シニア海外ボランティア（長期）」の3つの区分のボランティアが活動しています。「青年海外協力隊（短期）」は1名、「シニア海外ボランティア（長期）」は3名、残り81名は「青年海外協力隊（長期）」です。

性別と職種別にグラフを紹介します。まずは性別です。



「途上国で1人で生活をする」という大変そうな印象から、なんとなく「男性が多いのでは…」と思われていた方も多いのではないのでしょうか？現在のマラウイ隊員は圧倒的に女性が多いです。これまでの全世界の累計派遣者数では、男性 27,978名、女性 21,384名と男性が多いのですが、現在活動中のボランティアは男性 1,243名、女性 1,385名で女性が多いです（2016年6月30日時点）。

次に職種別のグラフは以下の通りです。



現在マラウイでは 21 種類の職種のボランティアが活動中です。要請内容の幅が広い“コミュニティ開発”（以前は“村落開発普及員”と呼ばれていました）という職種が要請数、応募者数ともに最も人数が多く、マラウイ隊でも最多となっています。他国では、この他にも「バレーボール」「水泳」「柔道」等のスポーツ系の職種や、「観光」「服飾」「きのこ栽培」「珠算」と珍しい職種もあり、様々な職種のボランティアが自分の専門性をいかして活動しています。



## 7月の活動の様子



7月12日に第3タームが終了し、13日に生徒達は自宅へと帰っていきました。マラウイも日本の学校と同様に3学期制なので、次にみんなが学校に戻ってくる時には新学年になり、新入生を迎えます。

7月はターム休みまでの間、引き続き聴力検査をしながら、次のタームからの活動の計画を考えていました。次のタームから、本格的に補聴器の装用指導を始めようと思っています。そのための導入（説明の仕方の確認もかねて）のために、一番低学年の Standard 1 - A の教室で日本から持参した“電池チェッカー”を使って、生徒と一緒に補聴器の電池残量を調べる練習をしました。

配属先の学校では、基本的に生徒全員ドネーションされた補聴器を1人2台（両耳）ずつ持っています。しかし、そこにはいくつかの問題点があります。

### 補聴器に関する問題点

- ①アフターケア（月1回～2カ月に1回程度）として、クイーンエリザベス病院の医師と看護師が補聴器の点検と耳の診察をしに来てくれるが、Standard 1 の生徒だけが対象。
- ②そのケアのある日以外で補聴器を使用している姿をほとんど見ない。ケアの日も、その時間のみ使用しているクラスがほとんど。
- ③Standard 2 以上の生徒も、もらったはずなのに、「無くした」「盗まれた」「壊れた」「使っても効果がない」「電池がもらえない」「めんどくさい」等、様々な理由でほぼ全員使用していない。
- ④Standard 1 の授業で使用するときも、電池がないまま使用していることが多い。また、イヤモードが耳にきちんとはまっていなかったり、左右間違えていることも。
- ⑤「ピーピー」音が漏れる“ハウリング”への対処法を知らない。
- ⑥電池を補聴器に入れたまま片づける。そして、たまにしか使用しないのですぐに電池が切れる。
- ⑦聴力検査や補聴器の調整ができる職員がいないため、そもそも聴力に合っているか不明。  
中には、聴力が低下したのでは（発音が良いが検査で重度になる）？という生徒もいるが、その生徒達は明らかに補聴器の出力が足りていないと思われる。



このように、補聴器を活用できるようになるまでの道のりはなかなか険しいと思われそうですが、私の要請内容と、配属先の一番のニーズは「発音の改善」です。そのためには、“使える補聴器を持っているのなら活用しよう”というのが、今私が考えている目標です。

## ～ 生活・活動風景 その1 ～

Standard 1-A のクラスで、補聴器の電池チェッカーの使い方を説明してみました。説明だけの予定が、「写真を撮るなら補聴器つけさせるから待って！」と担任の先生が補聴器を用意してくれました。小さい生徒も自分で電池の確認ができました（下）。



せっかくなので簡単なゲーム。名付けて「使える電池はど〜れだ?」。使用済みの電池3個の中に新しい電池を1つ混ぜ、電池チェッカーで新しい電池を当てるゲーム。その場の思い付きで始めた単純なゲームでしたが、意外に盛り上がりました。みんな真剣。

いつも聴力検査をしているのは図書室。こっそり本を読みたい生徒が遊びに来ます。絵本を手に満足そうな表情！ただ、この時は検査中だったんだけどなあ…



マラウイの遊び。文章ではうまくルールを説明できません。石と線を引ける環境があればどこでもできます。



## ～ 生活・活動風景 その2 ～



遊んでいるわけではありません。翌日に寮を出るため、いつも寝る時に使っている毛布を洗濯しています。汚れを落とすために写真のように2人で地面に何度も叩きつけます。



自宅に帰る日。生徒たちはこの日をとても楽しみにしています。この2人の表情がその喜びと解放感を物語っています。

自宅に帰る日は、保護者や兄弟が学校に迎えに来ます。迎えに来た家族をホールに集め、校長から注意事項や授業料の説明などがあります。その後一斉に帰るので、学校がトラックをチャーター。自転車タクシーより安いのでほとんどの人が利用します。そのため、荷台は人と荷物で超満員。誰か落ちるのでは…と本気で心配になりました。



保護者の迎えが遅れた“居残り組”。早く親に会いたくて泣いている子も。「写真撮ってあげるから泣かないで！」と撮影した一枚。小さい頃から親元を離れて寮で生活する大変さに気付かせてくれた瞬間。

夏休み。卒業生が家に遊びに来てくれました。





## 隊員紹介



今月も、学校のターム休みを利用して、隊員の任地の見学を行ったので、さっそく今回から隊員紹介を始めたいと思います。初回は、私の任地の隣のブランタイヤ県のルンズで、先ほどマラウイで最も人数が多いとお話した“コミュニティ開発”という職種で活躍している、同期隊員の紹介をしたいと思います。佐藤博亮隊員、通称“サティ”は、料理の腕一流、さらにアクセサリー作りなどの物づくりも器用にこなす、万能型の隊員です。マラウイに来てから、首都で研修を受けていた1か月間で、パスタ・レアチーズケーキ・茶碗蒸し等、いつも私たち同期隊員の胃袋を喜ばせてくれていました。次のページに、今回私が見学・体験させていただいた“かまど作り”の写真も掲載しています。



### 隊員情報

(掲載内容は本人より了承を頂いています)

名前：佐藤 博亮(さとう ひろあき)

隊次：平成27年度3次隊

職種：コミュニティ開発

配属先：ブランタイヤ県ルンズ農業普及所

出身：山形県

※写真は以前私の任地を見学しに来てくれた時に撮影したものです。

### ～隊員からのメッセージ～

私は今年の1月から、マラウイ南部の最大都市ブランタイヤ県にあるルンズ農業普及所に、コミュニティ開発という職種で配属されています。「コミュニティ開発」とは地域の人たちと生活を共にする中で地域の抱えている問題を見つけ、地域の人たちと解決に取り組むことで生活全般の向上を目的としています。

私の任地では近年の急速な人口増加に伴う煮炊き用の薪の需要増加により、森林伐採が深刻な問題となっています。任地で主流なのは3つの石に薪をくべる簡易かまどで、燃烧効率が悪いため一度の調理で大量の薪を消費してしまいます。熱効率の良い改良かまどを普及することで薪の消費量を減らし、森林を保全し、薪集めにかかる時間を削減することで生活にゆとりを持たせたいと考え、現在は主に改良かまどの普及に取り組んでいます。

学生時代から国際協力に興味があり、大学では国際法を勉強していましたが、卒業後は銀行員として働いていました。しかしどうしても国際協力の道を諦めきることができずに、ダメ元で協力隊を受けたところ、マラウイに来ることができました。マラウイでは温かい地域の人たちに囲まれ、毎日を笑顔で過ごすことができます。私も活動を通して、地域の人たちに笑顔を提供していきたいです。

佐藤 博亮

## ～ ルンズ・かまど作り～



かまどの材料は、れんが・アリ塚の土・わら・水・ヤギの糞（本当は牛糞の方が良い）等です。この村では以前にも他の家で同じかまどを作ったため、私たちが到着した時には村の方が全ての材料を準備してくれていました。



全ての材料をくわや手で混ぜ合わせて、粘土ぐらゐの固さの土を作ります。



レンガの土台を作った土でコーティングする作業です。乾燥時にひび割れないよう、隙間なくコーティングするのがポイントだそうです。私もいろいろとお手伝いをさせてもらいました。



完成！！このまま一週間かけて乾燥させると、使用可能になります。お鍋を乗せるとこんな感じです。



# 分科会報告



「分科会」とは、同国で活動する職種や分野が同じまたは似ているボランティアが集まり、意見交換やお互いにワークショップ等を行う会です。マラウイにも「医療分科会」「理数科教育分科会」「コミュニティ開発分科会」などいくつかの分科会があります。私は「障害者支援分科会（正会員）」と「医療分科会（副会員）」に参加しています。7月28日、以前に見学したゾンバ病院で、「医療分科会」「5S分科会」「障害者支援分科会」の合同分科会が開催されました。



## 1. 午前の部

### ・JICA ボランティアによるプレゼンテーション

- 理学療法士2名「午後に訪問予定だった患者さんの情報共有」「ポジショニングについて」
- 看護師2名「褥瘡、体位交換について」「口腔衛生、5Sについて」
- 栄養士1名「患者さんの栄養管理、カロリー計算方法について」

合計5名のボランティアがプレゼンテーションを行いました。ゾンバ病院の現地スタッフも参加していたため、プレゼンは全て英語でした。中には専門的な医療英語も含まれていて、語学が苦手な私には大変でした。しかし、どのプレゼンも、実際にベッドを使って体位交換の実技を取り入れたり、小グループに分かれて相談しながらカロリー計算を行うなど、他職種の人にも分かりやすい工夫がされていました。

- ・ゾンバ病院スタッフによるプレゼンテーション。「ゾンバ病院の5Sの取り組みについて」  
“5S”とは、日本の企業でも多く取り入れられている、整理整頓の徹底を通して、職場環境や業務効率の向上を目指す活動です。「整理」「整頓」「清掃」「清潔」「しつけ」のローマ字頭文字をとって名付けられていますが、英語・チェワ語でも5Sの単語があります。  
英語：「Sort」「Set」「Shine」「Standardize」「Sustain」  
チェワ語：「Sankhulani」「Sanjani」「Salalitsani」「Samalitsani」「Sungitsani」
- ・ゾンバ病院の見学。主にゾンバ病院での5Sの取り組みを見せてもらいました。



## 2. 午後の部

午後の部は当初、実際の患者さん宅を訪問（フィールドビジット）して、各職種で専門性をいかしてアプローチを考える活動が予定されていました。しかし、当日に急きょ患者さんの容態が急変してしまったため、予定を変更して、ゾンバにあるヘルスセンターの見学を行いました。

マラウイでは30kmに1つの基準でヘルスセンターが設置されているそうです。ここでの役割は、日本の“保健センター”と“小さなクリニック”が合わさったものです。8月に他のヘルスセンターの見学を行ったので、詳しい説明は次回行います。

## ～医療・5S・障害者支援合同分科会 in ゾンバ～

デモンストレーションの様子。写真は理学療法士隊員さんによる、ポジショニング（座位）の実演です。

プレゼンテーションの様子。プロジェクターとパワーポイント。途上国でもIT化が進んでいます。



今回の分科会の参加者です。マラウイでは医療や保健分野の隊員がたくさん活動しています。

ゾンバヘルスセンターの外観。マラウイの建物としてはかなりきれいです。左がエントランス、そして地下鉄の駅のような下の写真がセンター内の様子です。



ヘルスセンターでは薬局もあり、ここで薬の処方もされています。写真は薬局内にある、薬の保管場所です。

このヘルスセンターでも5Sの取り組みがされているため、薬ごとに整頓されて保管されていました。日本では当たり前ですが、途上国では「使用済みの注射器が床に転がっている…」なんて光景もよく目にするのが現状です。

